

地域包括支援センターからの意見

認知症医療の充実

- 受診を勧めるが本人が拒否することも多い。どうつないでいくか。かかりつけ医がない場合には、精神科医師の往診体制があればと感じることも多い。
- 本人や家族にとって主治医の意見は大きい。
- 物忘れ外来の予約が数か月待ちであり、待ちきれず受診が遠のくことがある。
- 物忘れの症状が出現してから受診につながるまでに数年かかっているケースが多く、もっと早期に診断につながればと感じることが多い。

認知症ケアの質の向上

- 認知症初期～中等度（入口）の相談を受けることが多い（認知症障害高齢者の日常生活自立度がⅠやⅡaの状態像の人）。
- 高齢者夫婦や認々夫婦、独居世帯でかかりつけ医がいない人からの相談や、民生委員や近所の人など地域からの相談も増えてきている。
- 認知症の診断を受けたことで、先の不安が大きくなり、今まで車で外出していた人があきらめてしまう場合がある。
- 「認知症」とひとくくりにするのではなく、個人の性格等も見ながら支援していくことが大切だと感じている。
- 早い段階から予防も含めた社会参加や交流の機会という視点を持って関わっていくことが重要であると考えている。
- 今回のような情報交換は非常に大事であると考えている。

認知症の正しい理解の普及・啓発

- 認知症サポーター養成講座でも症状の説明などに焦点を当てるのではなく、誰でもなり得る病気であることをもっと伝えていくことが大切。
- 孫世代に対しても講座を行っていく必要がある。両親が仕事をしているため、孫が認知症の祖父母の面倒を見ている、という話も聞くため。
- 啓発だけが一人歩きすると、「この検査は認知症疑いのある人がするもの」と、検査だけで身構えられるという難しさがある。
- 元気な高齢者のうちから、認知症になると生活がどうなっていくのかを考えるよう、働きかけていく必要性がある。
- 認知症に対する恐怖感の解消や、どういった対応をしていくのか等を一緒に考えていく機会を作っていきたい。
- 認知症の診断はほかの病気と比べてもショックが大きい。
- まだまだ社会の中での偏見が大きく、正しく理解されていないように感じる。

認知症高齢者と家族を支える仕組みづくり

- 認知症による地域での孤立を予防する働きかけが必要と考えている。
- 外出時の声かけなど、ちょっとした隙間を埋める支援があればもっとできることが増えるのだろうという思いがある。
- 家族が負担に思っていることを発散できる場所が重要である。